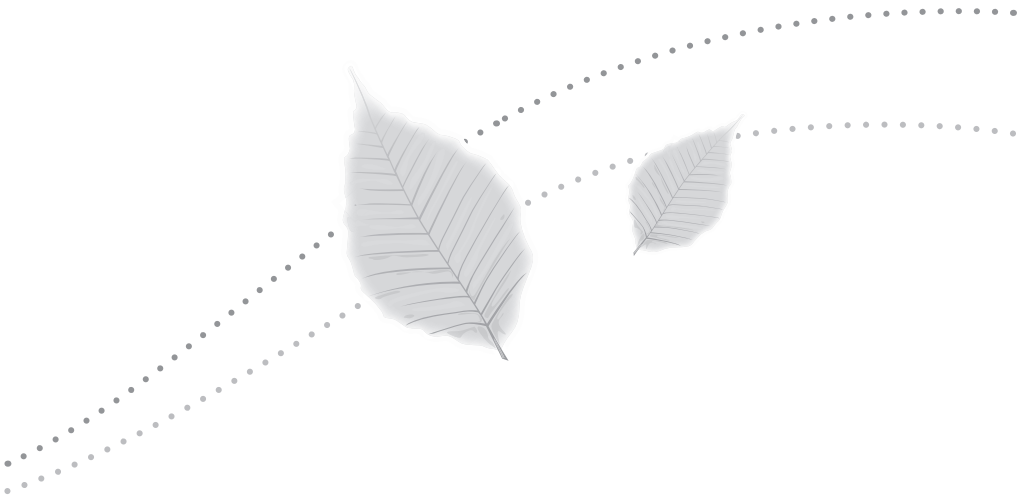


創造のための制約

高尾 隆



印象に残っていることがある。以前、アリストパネス作の『女の平和』の上演に参加した。ギリシャ喜劇の代表作で、世界史の教科書にも載っているものだ。アテネとスパルタの戦争に業を煮やした両市の女たちが亭主との性交渉をпойコットし、それに耐えきれなくなった両市の兵士が和解するという話だ。その脚本の読み合わせをしている時だ。私はつい、その下ネタのギャグに笑ってしまったのである。その時にふと気づいた。「今、二千四百年前のギャグに自分は笑っている！」と。演劇の歴史は古く、また幸いなことに古い戯曲が今でも多く伝えられている。紀元前のギリシャ劇も、六百年前の世阿弥の能の作品も、四百年前のシェークスピア劇も、現代でも読むことができるし、上演することができる。観ることもできる。なぜ数百年、数千年前の演劇作品がいまだに上演されているかといえは、それはこれらの作品が現代にまで通じる人間や社会の普遍性を描き出しているからと言えるだろう。長い時間がたつても人のすることはそんなに変わらないということだ。そして一方、継続して古典作品に興味を持つ演劇人がいて、たえず上演しながら新しい命を吹き込んでいるからだとも言えるだろう。ではなぜ演劇人は古典作品に興味を持ち、上演しようと思うのだろうか。

たかお たかし 東京学芸大学准教授。1974
年生まれ。専門は演劇教育、インプロ(即興演劇)。
著書に『インプロ教育』(フィルムアート社)など。

古典は創造のための制約だからだ。そう私は思うのである。

もちろん演劇人は一から作品をつくることもできる。もちろんそれも演劇づくりの魅力の一つである。だが、それだけでは物足りなくなってくる。自由に何でもつくっていいというのは、時に不自由に感じられることがある。創造性のパラドックス(逆説)だ。むしろ枠を与えられた上で、その中で何かをやらなければならぬ時の方が、自然にさまざまな発想が生まれてくることもある。自由は創造の敵、制約は創造の母、となることがあるのだ。

一方で、もし古典があまりに強すぎる制約で、このようにしか上演してはならないという固いものとしたら、今度はつくり手を縛り、不自由にしてしまう。完全に制約がない状態と、完全に制約されている状態との間。そこに創造が生まれるエリアがあるのだろう。馬を縛っておかないとどこかに行ってしまうが、馬を縛りつけてしまうと死んでしまうのである。

現代の演劇において、古典を正しく上演しなければならぬという考え方は弱くなっている。むしろ、古典からどれだけ今までにない新しい解釈を引き出せるかが演劇人にとっての挑戦だ。すばらしい古典作品は創造性をかき立てる制約とな

る。演劇人たちは古典に挑戦し、古典の制約の中でもがき、そこで自らの創造性を広げること、古典の枠を破っていく。新しい演出の新しい作品を生み出していく。そして、それが次の時代の古典となり、芸術文化は継承されていくのだろう。

同じ文化の継承であるからだろうか、芸術と教育には似ているところがあるように思う。何かが継承されていく時には、命を新たに吹き込む創造的な力が必要だ。いくら正しく深い理解であっても、それをバケツに水を満たすように子どもたちに注入するのであれば、古典の創造を生む力は死んでしまうだろう。もちろん、古典はどうでもいい、どのように読んでもかまわないとなってしまう、それはそれで子どもたちの興味を引かないものになってしまうだろう。古典が人の創造や学びに火をつけるものにしていくためにはどうしたらよいか。これは、芸術でも教育でも共通して探究しなければならないことであろう。

私の専門である演劇教育では、近年、ギリシャ劇が積極的に扱われるようになってきている。ギリシャにおいて、演劇は民主制と同時に生まれた。二千四百年前の演劇から民主主義や共同体を想像し、創造する。そのような時代に今、私たちは生きていく。